文化財発掘Ⅲ

―激動の幕末と京大キャンパス―

「考古学」や「発掘調査」ということばを聞いて、皆さんは何を頭に思い浮かべられるでしょう。多くの方が、古代エジプト文明や中国の兵馬俑、弥生時代の銅鐸など、古くさかのぼった時代や、その時代を代表する遺跡などを思い浮かべられるのではないでしょうか。しかし、考古学や発掘調査が対象とする範囲は、古い時代に限定されません。戦国時代の城郭跡や江戸時代のお墓はもちろんのこと、近年では時に、第二次世界大戦にかかわる戦跡なども、考古学研究の対象とされます。今回の特別展でとりあげるのも、日本の歴史の中では比較的新しい時代として位置づけられる「幕末」です。

幕末において、京都は時代の移り変わりの渦中にありました。池田屋事件、禁門の変、大政奉還…、幕末に京都で起こった政治的な事件をあげればきりがありません。京都大学吉田キャンパスのある鴨川の東も、急激な変化の影響の外にはありませんでした。諸藩の藩邸が短期間に相次いで建てられ、それまで田畑がひろがっていた景観からは一変しました。これまでにキャンパス内でおこなわれた発掘調査において、この時期に建てられた土佐藩邸や尾張藩邸のものと考えられる堀や水路などが確認されています。また、最近の調査で、キャンパスの南端から徳島藩邸にかかわる可能性のある遺構が発見されました。今回の展覧会では、京都の幕末を考える上で重要なこれらの資料、すなわち、藩邸に関連する遺構と、そこからみつかった遺物をとりあげます。

京都大学の地中から発見された埋蔵文化財をゆっくりとご覧ください。幕末における京都の急激な変化を感じていただく機会となれば幸いです。

熊野構内出土の瓦

幕末の京大キャンパス

嘉永６年（1853）にＭ．ペリー率いるアメリカ合衆国の黒船艦隊が浦賀に来航したことにより、日本は激動の時代を迎えた。目前の脅威として突然現れた「異国」とどのようにつきあっていくか、また、異国船の来襲により動揺する日本をどのようにまとめていくかを決める際に、朝廷の所在した京都は、政治の中心として返り咲き、日本中からの注目を集めることとなった。

とくに、徳川家茂（とくがわいえもち）が将軍としては約 200 年ぶりに上洛した文久３年（1863）頃になると、諸藩が多数の藩士を京都に集結させた。京都に藩邸をもっていなかった藩だけでなく、京市中の藩邸では藩士を収容するための十分な面積を確保できないと考えた多くの藩が、市中を離れた地域にあらたな藩邸を建てることとなった。

慶応４年（1868）に描かれた京都の絵図である「改正京町御絵図細見大成」をみると、当時の京市中およびその周辺にどのような建物が並んでいたかがわかる。絵図の中で、現在の京都大学吉田キャンパスがある鴨川の東の吉田付近（図１）に目を向けると、通りをはさんで南には「尾張屋敷」（尾張藩邸）が、そして北には「土州屋敷」（土佐藩邸）が描かれる。これらの藩邸は、幕末より前の時代に描かれた絵図にはみられないため、幕末になってから建てられたものである。

これらの藩邸の存在を裏付けるように、吉田キャンパス内における発掘調査では、幕末から明治はじめにかけての遺構が確認される。図１に示した幕末の絵図と、右頁の図２に示した京都大学吉田キャンパス内における幕末の遺構の分布図を対照していただきたい。今出川通の南にある本部構内からは尾張藩邸に、そして、北にある北部構内からは土佐藩邸にかかわる遺構や遺物がみつかっている。

さらに、近年におこなわれた吉田キャンパス南端に位置する熊野構内における発掘調査で、幕末から明治はじめ頃の遺構があらたに確認された。「改正京町御絵図細見大成」（図１）を再び参照すると、この地点には「阿州屋敷」（阿波の徳島藩邸）があったことが判明する。

今回の特別展では、これら京都大学吉田キャンパス内における発掘調査で検出された幕末の藩邸の遺構と、それに伴ってみつかった遺物を紹介する。また、幕末を生きた歌人である大田垣蓮月（おおたがきれんげつ）の製作した陶器が病院構内からまとまってみつかっているため、これらもあわせて紹介する。

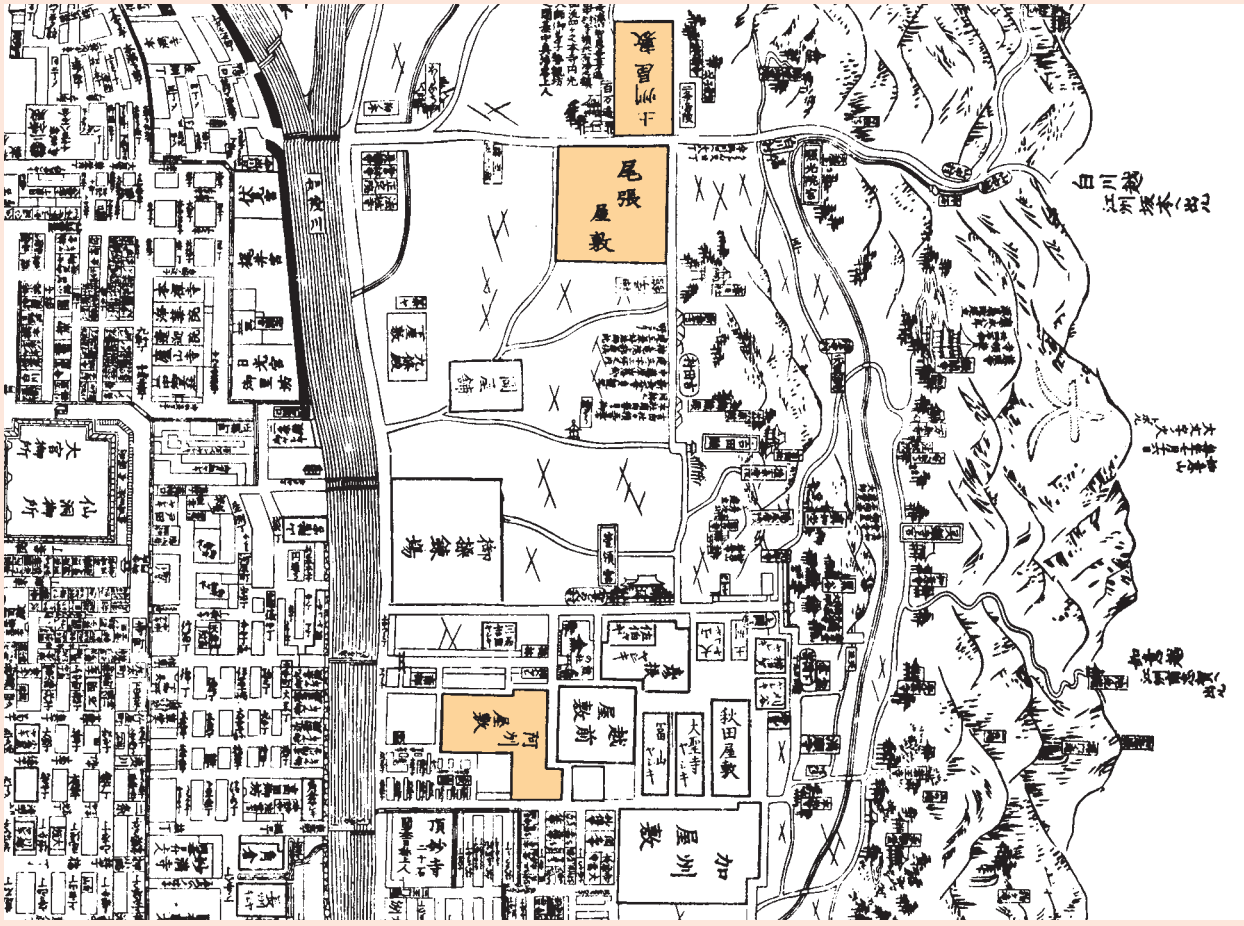

図１．幕末における鴨川の東（「改正　京町御絵図細見大成」を改変）

図２．京都大学吉田キャンパスにおける幕末の遺構と遺物の発見地

尾張藩邸跡

尾張藩は、文久３年（1863）10 月頃に、屋敷を設けるための土地を吉田村に購入した。それ以降、主殿をはじめとする諸施設が徐々に営まれ、京都における同藩の拠点として重要な役割を担うにいたった。愛知県公文書館に架蔵される「吉田御屋敷之図」には、「三万三千三百三十三坪」と書きこまれており、尾張藩の吉田邸のひろさが確かめられる。吉田邸は、明治４年（1871）に処分されるにおよんだ。

これまでにおこなわれた京都大学本部構内における発掘調査で、尾張藩吉田邸に関係するものと考えられる遺構が検出されている。まずは、検出された堀の遺構に着目してみよう。これまでに、本部構内の南部一帯で、堀と思われる大きな溝がみつかっている。1980 年に構内東南部でおこなわれた発掘調査では、屈曲して西と北に続く溝が検出された（図３）。1987 年に構内南部でおこなわれた立ち合い調査では、東西に続く溝が、また、2000 年に構内の西南隅でおこなわれた発掘調査では南北に続く溝が確認された。これらの溝が藩邸の堀であったとしたら、これらは藩邸の東南隅と、南限および西限を示すものである。

図３．尾張藩邸堀の東南角（本部構内・南東から）

図４．尾張藩邸水路（本部構内・西から）

続いて、検出された水路について紹介しよう。これは、前述の 2000 年の本部構内西南隅の調査で確認された遺構である。水路は、調査区の東辺から西南部へ向かって、屈曲しながらはしる。水路の側壁は、石積や杭で固定した横板で構築された。また、水路の一部においては、底に平石が敷き詰められた（図４）。

当時の尾張藩吉田邸を描いた「吉田御屋敷惣図」（名古屋市蓬左（ほうさ）文庫所蔵。図５）には、四方の空堀や邸内南半をはしる水路が描かれる。調査でみつかった溝や水路は、まさに、絵図に描かれたものであろう。

さらに、2002 年におこなわれた時計台の改修・増築工事に先立つ調査では、集石遺構がみつかった。遺構からは陶磁器や瓦などがまとまって出土しており、幕末にこの地点において瓦葺きの建物が存在したことの証左となっている。

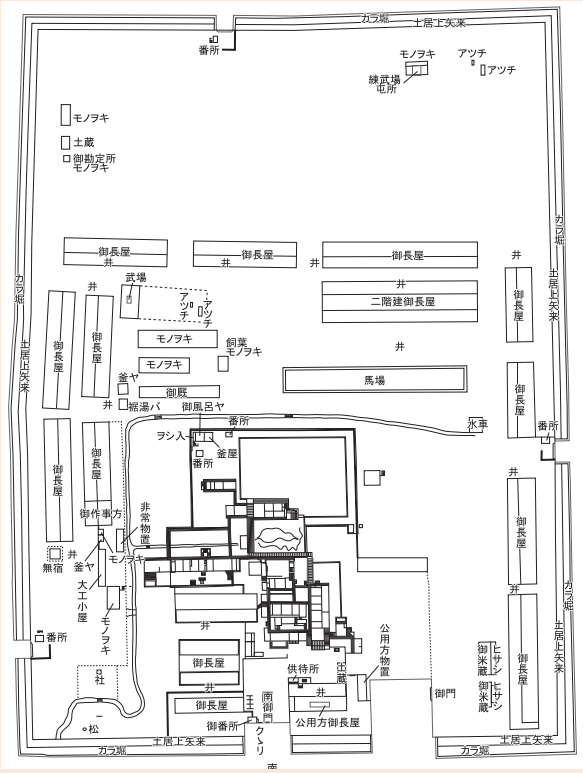

図５．尾張藩吉田邸屋敷図（「吉田御屋敷惣図」より復元）

図６．尾張藩邸跡出土の御小納戸茶碗

図７．尾張藩邸跡出土の墨書平椀および墨書焜炉

尾張藩邸跡出土遺物

尾張藩吉田邸跡から出土した遺物にも、注目すべきものが多い。椀・皿・徳利・猪口などの食器のほか、植木鉢・火鉢・焜炉・すり鉢・灯明受皿といった、藩邸に詰めていた藩士たちの生活を想起させる遺物が多数みつかっている（図８）。

国元の尾張との強いつながりを示すものとして、「御小納戸茶碗（おこなんどちゃわん）」があげられる（図６）。灰釉の椀で、見込みと外面に、「小」字が鉄釉で書かれる。尾張藩の特注品であり、瀬戸・美濃窯産と考えられる。京都大学本部構内におけるこれまでの調査で、２点の御小納戸茶碗が出土した。なお、この茶碗は京都の尾張藩吉田邸跡からだけでなく、江戸の尾張藩市谷（いちがや）邸跡である、東京新宿区の尾張藩上屋敷遺跡からも出土している。

もう１つ、国元の尾張との関係を考える上で重要な遺物として、刻印瓦があげられる。前述の集石遺構からみつかった瓦の中には、「㊞」の刻印がおされたものがある。江戸の尾張藩市谷邸跡でも同じ刻印をもつ瓦が出土している。これら「㊞」の刻印をもつ瓦が、18 世紀末以降に尾張の常滑で、御用瓦屋であった山田庄八によって作られたものであることも判明している。国元の尾張で生産された瓦が、京都や江戸へ運ばれ、藩邸の屋根を葺くために用いられたのである。

出土した墨書土器にも注目すべきものがある。平椀のいくつかは、高台内側に墨書をもつ。「林」「サンケ」「京」「灯」「尾兵」（図７左）などの文字が書かれる。中には、椀のもち主を示したと考えられる墨書が含まれる。また、遺物の年代を示す墨書もある。土師質の小型焜炉に書かれたものである（図７右）。底部外面に、「戊辰十二月十日」「於今出川通」「弐百廿四穴」と書かれる。「戊辰」は明治元年（1868）を、「穴」は孔あき銭をあらわすと考えられる。

図８．尾張藩邸跡出土土器

図９．土佐藩邸南堀（北部構内・西から）

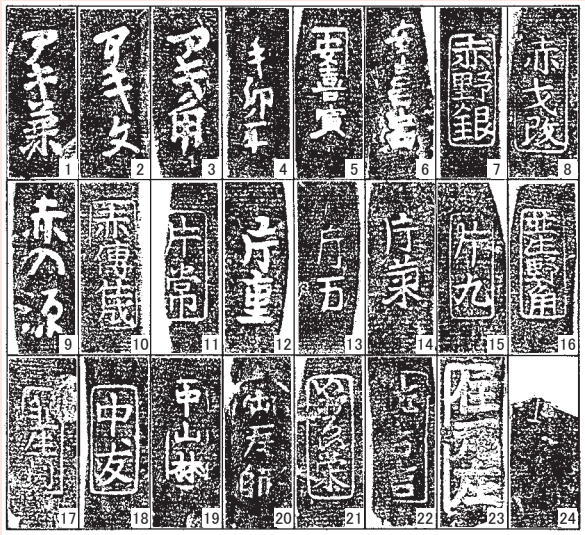

図 10．土佐藩邸跡出土瓦の刻印

土佐藩邸跡

「改正京町御絵図細見大成」（図１）をみると、現在の京都大学北部構内にあたる位置には「土州屋敷」が描かれる。土佐藩白川邸である。

この建物はもともとは、幕府による大坂湾警衛の命令に従い、文久元年（1861）に住吉（現在の大阪市住吉区東粉浜２丁目）に建てられた土佐藩の陣屋であった。その造営にあたっては、木材や石材、人夫などが土佐から運搬・徴発されたことが判明している。しかし、土佐藩は慶応２年（1866）に大坂湾岸の警衛を免除されたため、不要となった住吉陣屋は京都へ移築され、白川邸となった。慶応３年７月末以降、白川邸は中岡慎太郎（なかおかしんたろう）を首領とする陸援隊（りくえんたい）の屯所となったことが知られるが、程なくして慎太郎は暗殺されており、その拠点としては長く続かなかったと推断される。

北部構内でみつかった主要な幕末頃の遺構として、堀があげられる（図９）。堀は、検出された位置から、藩邸の南堀と考えられる。この遺構から出土した瓦には、「アキ兼」、「赤野銀」、「片常」、「韮生（にろう）□」、「中山林」、「御瓦師」、「いおろい栄」、「佐古吉」、「住瓦庄」などの刻印（図 10）がおされるが、これらの銘のほとんどが土佐の地名と関係する。つまり、これらの瓦の大半は国元の土佐で作られ、住吉で使われたのち、京都の白川邸へ運ばれたと考えられるのである。図 11 には、刻印から推定される瓦の製作地を示した。

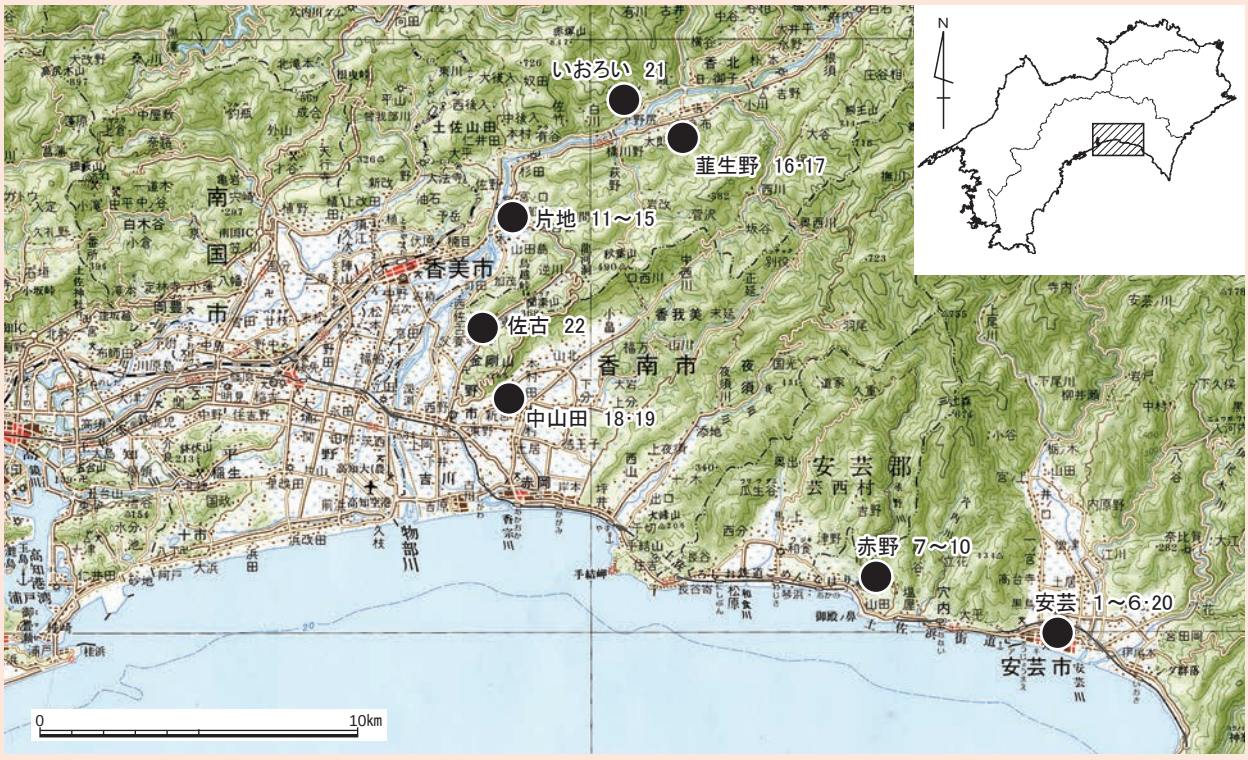

図 11．土佐藩邸跡出土瓦の製作地（地図中の数字は図 10 の各刻印右下に示した数字と対応）

図 12. 瓦積の中に含まれていた家紋瓦

図 13. 推定徳島藩邸跡出土の墨書土師器

推定徳島藩邸跡

2015 年に京都大学熊野構内でおこなわれた発掘調査で、幕末頃の遺構がみつかった。それは、堀状の溝を埋めて構築された瓦積の遺構である。「改正京町御絵図細見大成」（図１）には、熊野神社の南西にあたるこの地点に「阿州屋敷」、すなわち阿波徳島藩邸が描かれる。よって、みつかった瓦積は、徳島藩邸に関係する可能性がある。

瓦積にかかわって注目されるのは、瓦積の中に２点の家紋瓦が含まれていたことである。１点は徳島藩主の蜂須賀（はちすか）家の家紋である「卍」紋をあらわし、もう１点は土佐藩主の山内（やまのうち）家の家紋である「土佐柏」紋をあらわす（図 12）。前者は、瓦積とこの土地にあったと考えられる徳島藩邸のつながりを示唆する。ただし、後者がどのような事情でここに置かれたかについては、判断が難しい。

積まれた瓦には、多数の鬼瓦や道具瓦（巻頭写真）が含まれていた。しかし、鬼瓦や道具瓦のオモテ面は瓦積の正面である北面以外の方向に向けられていた。よって、これらの瓦はどこか別の建物で使用されていたもので、熊野構内には二次的に積まれたと考えられる。

瓦積から少し南西へ離れた地点、藩邸の建物があったと想定される場所でみつかった小穴からは、地鎮のために埋納されたと考えられる２点の土師器が発見された（図 13）。土師器には墨書が確認された。梵字でまじないの文句が書かれたようだ。長岡宮跡第 415 次調査でも、同様の墨書土師器が発見されており、それは明治４年（1871）頃に埋納されたものであるという。今回みつかった瓦積の年代を考える上で重要である。

図 14. 徳島藩邸にかかわる可能性のある瓦積（熊野構内・北から）

蓮月焼

京都大学吉田キャンパスからは、幕末に作られた一風変わった陶器が出土する。それは、器面に和歌が墨書きされた、あるいは釘で刻みこまれた一群の陶器である（図 15）。これらの特徴的な陶器は、その製作者であった大田垣蓮月（おおたがきれんげつ）の名前にちなんで、「蓮月焼（れんげつやき）」と呼ばれる。

大田垣蓮月は、寛政３年（1791）に京都で生まれ、明治８年（1875）に没した幕末を代表する歌人である。その半生は、２人の夫および４人の子供と死別するという悲しみに満ちたものであった。33 歳で２人目の夫と死別し、それを機会に出家した。そして、42 歳の時に養父であった西心と死別した後、生活の糧を得るために陶器を作るようになった。それらの陶器には、自らが詠んだ歌が書きこまれた。

生涯に渡って引っ越し回数の多かった蓮月であったが、慶応２年（1866）に終の棲家となる西賀茂村の神光院に居を移すまで、彼女はたびたび聖護院村に住んだ。当時の聖護院村は、現在の京都大学病院構内を含む。

現在までにおこなわれた吉田キャンパスでの発掘調査で、蓮月焼やその可能性のある陶器が、病院構内・医学部構内・吉田南構内・本部構内の、10 箇所の調査地点からみつかっている。「蓮月焼」の中には、①蓮月が自身で製作したもの、のほかに、②２代目蓮月を名乗った隣人の黒田光良（くろだこうりょう）が製作したもの、③京都土産として蓮月焼が有名になった後に贋作者たちが真似て製作するようになったもの、さらに、④贋作者たちが陶器を作り、蓮月がそれに和歌を書いたもの、が存在することが知られている。吉田キャンパスの発掘調査でみつかる蓮月焼の中には、①の大田垣蓮月が聖護院村に住んでいた際に自身で製作したものが少なからず含まれると考えられる。

とくに、病院構内の東南部からは多数の蓮月焼が集中して出土したが、この地点は、蓮月が居住したと推定される土地にあたる。この地点から出土した蓮月焼の中には、釉が陶器の割れ目に入りこんだ資料、つまり、焼成時に失敗したと考えられる資料が含まれる。陶器の焼成は、粟田や清水にあった窯元に依頼しておこなわれたことがわかっている。よって、これらの陶器は、焼成後に蓮月の居宅にもち帰られた後、失敗作として廃棄されたものと考えられる。

図 15. 病院構内出土の蓮月焼